

大内クリニツク 特別治療室2——サンプル——

看護師の狭山から渡された書類を見る。

入院処置要望書

- 一・前立腺への振動チップ埋め込み手術
- 二・精囊横膨縮バルーン埋め込み手術

計画期間二週間。

依頼人・宮下 一成(三十三)

患者・宮下 空(二十五)

「宮下さんって紹介だったよね」

「はい。篠崎様からのご紹介です」

「篠崎さん、安西さんとだいぶ楽しく過ごしてるみたいだね」

「はい。喧嘩もないそうですよ」

「いいねえ」

「……私たちも喧嘩はありませんが」

「うん、ありがとう。狭山が大人だからね」

「……惚れた者の負けってことですよ」

「狭山に書類を戻し病室に向かう。すでに二人は入っていると聞いている。」

「失礼します。担当医の大内です」

「看護師の狭山です。宜しくお願ひ致します」

※ ※ ※

とても綺麗な病院だな、というのが最初の感想だった。お金持ちの個人病院。病室も広くて綺麗。建物自体は少し建ってから時間が経過しているようだけれど、どうやらリフォームされているらしい。壁も床も綺麗で、きちんと掃除も行き届いている。

「ご連絡ありがとうございました。宜しくお願ひ致します」

ご連絡、とは何のことだろうか。疑問を頭に浮かべながら、立ち上がった恋人に倣い腰を上げる。

「いえいえ、突然のキャンセルがありましたから」

キャンセル。ということは予定が繰り上がったのだろうか。よく分からないが、軽い口調からすると大した問題はないらしい。それにどうやら宮下がゴリ押ししたのではなく医師からの連絡だったようだし。

話が途切れたタイミングを見計らい、頭を下げて挨拶をする。

「空《そら》です。宜しくお願ひします」

友人に紹介してもらったところだから安心していい、と宮下は言っていた。それに、今日までに何度も打ち合わせをして、いい先生なのは分かっているから、とも。

「空くん、宜しくね。大内です」

「宜しくお願ひします」

手術の打ち合わせなんて、机とテーブルがあつて、レントゲンを写す機械があつて——そんな場所でするものだと思っていた。ドラマであるような。けれどここでは病室でするらしい。と言つても、ちゃんとソファとテーブルが置かれているのでそのための場所でもあるのだろう。

「まず、今日の手術の確認ですね。空くんは聞いている？」

慣れ慣れしいとは思わなかった。自然体。むしろ敬語を遣われるより気が楽と思えるような。

「えっと……はい、少しだけ」

普段ミルキングで弄つてもらっているところにバルーンを入れると聞いている。そうすると、ミルキングの手間が省けるからと。手間、という言い方はもちろんさされていないけれど、要するにそういうことだと理解している。

それから前立腺にパイプを入れる、とも。パイプというか、パイプ機能のついたチップだったか。それを入れればローターとかを使わなくても好きなときに前立腺を弄つてあげられるよ、と甘い声で言われた。だから領いてしまったけれど、細かいことは聞いていない。

「じゃあ、手術前の準備から流れを説明するね」

医師は一つ一つ丁寧に説明してくれた。

まず、今日から入院。予定は二週間。その間宮下は仕事があるので一人での入院にはなるけれど、医師も看護師もいるし、それに宮下の身体さえ空けばいつでも好きなときに宿泊できること。それは家で宮下も言っていたけれど、医師の口からも聞いてすごく安心できた。だって毎日一緒に寝ていたのに、二週間も一人で寝るなんて寂しすぎる。

「手術は明日ですが、今日から検査を始めます」

その言葉は宮下に向けられていた。恋人でありながらの主従関係。空の身体は宮下のものであるということ。空の身体は理解しているのだろう。不安を拭うような言葉は空自身へ。けれど身体のことについては宮下へ説明される。

「最初は男性機能の検査です」

「それはどのような？」

おや、と思った。打ち合わせは終えていると言っていたけれど、そこまでの詳しいことは聞いていなかったのか。

（まあ、忙しいもんな……）

入院日である今夜と、手術日である明日の夜は泊まってくれると言っていた。もちろん他にも余裕が出来たら泊まると。でも最低でも今日と明日の二日間を空けるために仕事を無理して詰めてくれていたのだ。

「正常に射精ができるかの検査です」

医師が書類を見ながら言った。けれどすぐに宮下が否定する。

「いえ、それは不要です。もうずっと射精させておりません。手動でのミルクングから自動への切り替えのために手術に踏み切りましたから」

その言葉が胸に刺さる。

（面倒になったのかな……）

付き合い始めてから、もう何年も経つ。最初は普通にセックスをしていたし、フェラチオしてもらって飲んでもらったこともある。

恋人と呼べる関係ができたのも、もちろん身体の関係を持ったのも宮下が初めてで、心も身体もことごとく愛されるというのはすごくすごく気持ち良かった。一人でするオナニーなんかとは比べ物にならなくて、同棲前では自分でも射精できなくて、泣きながら電話をしたことさえあった。そんなときは夜中でも駆けつけてくれて、泣きじやくる身体を抱きしめながら扱ってくれた。そして射精したらたくさん褒めてくれて、「してあげるから、もう一人でしないでいいんだよ」と優しい言葉をくれた。それからもう、一度も自分ではしていない。

その頃はまだ空も働いていて、二人の繁忙期がずれると全然会えないときもあった。そんなときは抜いてもらえなくて、射精しなくて苦しいと思ったこともあったけれど、「自分にはもう宮下という存在がいるのだから、自分でなくていいんだよ」と思えば我慢することができた。それくらい「もう一人でなくていいんだよ」という言葉が嬉しかったのだ。

そして、同棲をするようになって、毎日顔が見られることが嬉しくて、でも仕事ですれ違うことも多くなって、寂しくて泣いていたら退職するように言われて、それから毎日宮下のことだけを考えながら過ごしていた。でも毎日毎日に宮下のことで頭がいっぱいになるうちに身体を愛されたい欲が高まって、でもやはり宮下は忙しくて——そして宮下の帰りが遅い夜に勃起を持って余して泣いているのを帰宅した宮下に見られ——。

宮下は出会った頃と変わらない優しい腕で包んでくれた。そして事情を聞いた宮下はその翌朝、「俺がいない間に苦しくならないように」とそこで初めてミルクングをしてくれたのだ。そしてそれから毎日ミルクングをしてもらうようになった。

でも、やはり手間だったのだろう。仕事で忙しい中の毎朝のミルクング。でもしてもらわないと日中とても苦しくて、宮下が泊まりがけの出張で不在にするときなんかは身体を爪で傷付けて欲を誤魔化したりもした。それくらい苦しかったので、どうしても「ミルクングしなくていいよ」とは言えなかったのだ。

でも、そこまで——手術を選ばせるまで負担をかけてしまっていた。その罪悪感もあって手術に同意したのだけれど、やはりこうして宮下の口から自動ミルクングを望む言葉を聞いてしまうと胸が痛む。

「……そうですか、分かりました。では大腸の検査から始めましょう。検査食は食べられたかな」

突然切り替わった言葉遣い。急いで顔を上げて頷く。

「あ、はい……」

繊維の多いものは消化しきれず残ってしまう。それは普通の消化器科でも言われていることなので知っていた。だから渡された食事を三日間食べていた。

「では今から下剤をお渡しします。三リットル飲まないといけないので苦しいけど、ちょっとだけ頑張る

うね」

安心させるような笑みだった。宮下が大丈夫だよ、と言った意味が分かる。

横に控えていた狭山という看護師が大きなポトルを取り出した。

「薬剤が溶けています。水分でお腹いっぱいになります、頑張ってください」

ポトルは宮下が受け取った。二人の退室を見送り、宮下と二人きりになる。

「……一成《かずなり》さん……」

「怖い？」

「……ううん」

怖い。本当はすごく怖い。でも、宮下の負担にはなりたくない。それに欲の強すぎる自分が悪いのだ。

もつと性欲が少なければ宮下に迷惑を掛けることにはならなかった。

自分で出せないという泣きながらの電話も、毎朝のミルクキングも、きつとすごく負担だっただろう。それでも嫌な顔一つせずしてくれた。「つらかったな」と慰めてくれた。でも手術さえ頑張れば、もう手間を取らせることはないのだ。食事の合間、着替えの時間。いつだってただボタンを一つ押すだけでミルクキングできる。歯ブラシをしながらだっというし、職場からの帰宅中に押せば――。

(だからダメなんだよな……)

結局宮下を頼ることしか考えていない。宮下が仕事に行っている間に自分でボタンを押して処理をする

――その発想をしないから。だってそれなら宮下に負担を掛けることはないのだ。ボタン一つ押す手間さえも。出した精液の確認をさせる必要だってない。トイレに座ってボタンを押して、垂れたものはそのまま下水に流してしまえばいいのだ。でも、自らその提案をする勇気がない。

(言って、じゃあそうしてくれって言われたら……)

きつと寂しくなってしまう。でも、宮下のことを思えばそうすべきなのだ。

「空。お薬飲めるかな」

「あ……はい……」

「はい……」

「はい……」

ポトルからコップに移し、量を確認しながら飲んでいく。何杯も何杯も。そしてすぐに便意を覚えた。

「トイレ……」

「うん、一緒に行こう」

普段から、一緒にいるときはトイレだって一緒に行ってくれる。最初こそ恥ずかしかったものの、今ではもう見守られながらでないと落ち着かない。宮下の退勤時間が近い時間なら我慢して帰宅を待つてしま

うくらい。

「うう出ちゃうっ」

「お尻痛い……」

「ああ……たくさん出したからな」

お尻を拭いたときに痛みが走った。便秘を無理矢理出したわけでもないのに切れてしまったのだろうか。ベッドに座るのも痛くて立ったままいると、宮下が手を引いてベッドに上がらせてくれた。

「お尻を見せてごらん」

「はい……」

四つん這いになって、穿かせてもらったばかりのズボンと下着を下ろす。

くくく

「お疲れ様」

でも宮下は普段と変わらない優しさをくれた。病室に入るとすぐに抱きしめてくれて、頭を撫でてくれる。

「恥ずかしかった？」

「うん……」

「何が恥ずかしかったのかな」

「……お尻も……おちんちんも」

「恥ずかしくないよ。お尻もおちんちんも俺のものだ。恥ずかしいと思うべきなのは俺だよ」

カアア、と顔が熱くなる。やはり見られたら恥ずかしいと思うような性器なのだ。

「真っ赤だ。可愛い」

抱き上げられてベッドに寝かされる。まるでセックスの前みたい。覆い被さった宮下を見上げる。

「空、人生最後の射精だよ」

「……え？」

「選ばせてあげる。最後の射精を、するかしないか」

「あ……」

最後の射精。最後に射精をしたのはいつだっただろうか。そういえばさつき、二年と言っていた。二年、ミルキングを続けたと。もうそんなに経っただろうか。

「どうしようか。射精したいかな」

「したいっ！」

射精。もうずっとしていないことすら忘れてしまっていた程していなかった射精。

「でも、せつかく忘れた射精の快感を思い出してしまつて大丈夫かな？」

「あ……」

しない方がいいのかもしれない、と思った。きっと射精の快感を思い出したらまた「射精させて」と言つて宮下に迷惑をかけてしまうことになる。でも今のまま、射精の快感を忘れたままならそんなことを言わずに、ボタン一つでミルキングしてもらえようになる。

「しな……」

しない、そう言おうとした。けれど。

「男としての最後の悦びだよ」

(最後……)

最後になるのか。いや、そうなるだろう。だって、射精させてもらうのは宮下に迷惑を掛けることなのだ。

「ああでも、別れば自由だ」

その声はひどく冷たく聞こえた。一瞬、全ての思考が止まってしまふ。

「俺の元から逃げれば」

逃げる、なんて——まるでそれでは空が、空の意思で、空が希望して宮下の元から去るみたいじゃないか。そんなこと決してありえないのに。宮下が別れようと言つても泣いて縋るだろうと思うのに。きっとそのときは、どんな立場でもいいから傍にいさせてほしいと縋るだろう。家政夫でもいい。清掃担当でもいい。だから、どうにか近くにいさせてと。

「まあサイズはもう戻らないだろうが、空はネコだからおちんちんの大きさは関係ないだろう。自分で握つて、もしくは新しい恋人につまんでもらつて射精させてもらえばいい」

また、頭の中が真っ白になった。新しい恋人——？

「俺に小さくされた。ペニスを震わせて抱かれればいい」

「や……」

嫌、だ。そんなの、嫌だと言うのも嫌なくらい嫌だ。この話題自体が嫌。全部嫌。わざわざ嫌だと言いたくもない。でも言わなければ。なのに声が出ない。

「どうする？」

「あ……や……」

声が掠れる。まるで首を絞められているみたい。

「や……やだ」

「空？」

息が苦しい。吸っても吸っても、まるで肺に穴が開いたみたい。

「空……ゆっくり息をしよう。深呼吸だよ」

「んっ……はあっ」

俺に合わせて、と抱きしめられた状態で言われる。目を閉じて、宮下の呼吸を意識する。

「そう……上手……」

「う、はあっ……」

「いいこ……大丈夫……」

「うう……」

すぐ長く感じた。何十分もそうしていたように思う。けれど多分そんなことはなくて、せいぜい数分で、少しずつ落ち着いてくると身体の感覚が戻ってきた。

「いいこ……苦しかったな」

「んっ……一成さん、やだ……別れたくない……捨てないで」

「捨てる？俺から空を離すことはないよ」

「ほんと……？」

「ああ。さっきの話は空が射精したくて、俺といるのがつらくなったら、という意味だよ」

「やだあ……そんなことないっ！ならないっ！」

ありえない。宮下より射精を取るなんて。

「苦しくないか？」

「苦しいっ……一成さんと一緒にいられなくなると思ったら苦しいっ」

素直に言った。思ったことを口にした。それだけに、宮下は優しく笑った。

「よかった。俺も空と離れたくないよ。手術の後、身体が回復するまではミルクングできないけれど、頑張れるかな」

「んっ！」

頑張る。なんでも頑張る。一緒にいられるのなら何でもいい。

「ああ……空。よかった。ありがとう」

「僕は一成さんのだもん……」

そうだ。言いながら自分で納得する。だってこの身体は宮下のものなのだ。だからちゃんと、宮下といたいといけないし、宮下に管理してもらわないといけないのだ。

「回復したら、またちゃんとミルクングして、タマタマ苦しくならないようにしような」

「うん！」

よかった。ちゃんと毎日ミルクングしてもらえる。

夜抱いてもらうとき、毎朝のミルクングによって射精する液体は残っていない。けれど最初はそんなこと気付かなくて、知らなくて、セックスのときに射精をねだった。宮下は苦笑して、それから慰めのキスをくれた。

『おちんちんを擦っても、もう何も残っていないよ。擦れば擦るほど出さなくなっ、でも出すものもなくて苦しくなってしまうから、おちんちんは我慢しような』

『えっ……』

『苦しくなりたい？今よりもっと射精したいって気持ちが強くなってしまうよ』

『やだあ……』

『だろう？俺も苦しむ空は見たくないな』

『ん……』

優しい。苦しむのを見たくないなんて。宮下はたくさん空のことを考えてくれているのだ。そうだ、だってミルクングだって宮下が仕事で、空が苦しむならいようにと忙しい朝の時間を割いてしてくれていることなのだ。

『お尻でイけるな？』

『うん、お尻の気持ちいいところごしごしして』

抱かれる度、そうやって自らおねだりした。擦ってほしいところをちゃんと言えば、言えたことを褒めながら擦ってくれる。それでたくさん気持ち良くなって、「気持ちいいな？」って聞かれて「うん、うん」と快感に泣きそうになりながらイク。何度も、何度も。「射精しないとたくさんイけるな」とも言われて、そうなのかって知って、射精しなければこんな気持ちいいのをたくさん感じられるのかって思っで、それ

「……空？ 疲れたかな。気分が悪い？」

「え？」

「ぼーっとしてる」

「あ……うん……一成さんに抱ってもらうの思い出してたの」

「セックス？」

「うん。早くまたしてほしいなって」

「そうか。俺もしたいよ。空の好きなおところたくさん擦りたい」

「うん、僕もしてほしい」

退院が楽しみ、頑張るね、うん、でもちよつと怖い、大丈夫、一緒にいてね、もちろん――。

「可愛い……」

「んっ」

「手術中も、俺の夢見られるようにしておこうか」

「え？」

「全身麻酔だよ。……いや、夢が見られるようにというより俺が近くにいたいから痕を残しておきたいな」

「痕？」

「うん、キスマーク」

「つけてくれるの？」

嬉しい。普段からセックスのときにはいくつかつけてくれるけれど、セックス以外で付けてもらえるのは初めてだ。

「どこがいいかな」

「いっぱい」

全身にほしい。身体中、真っ赤になるまでつけてほしい。そう言うとき宮下は苦笑した。それは難しいな、

そう言いながらも諭すようにちゅ、ちゅと軽いキスをくれる。

「んっ」

顔に触れていた唇が首筋へ下り、それから手がパジャマに入ってくる。乳首を掴まれ、それから揉まれ

る。

「あつ、んっ」

「可愛い。乳首好きだな？」

「うん、すきっ」

宮下に触れられるまで、オナニーで乳首に触れたことはなかった。だからそこがそんなに気持ちいいな

んて知らなかった。

「いつか乳首でイけるようになったらいいな」

「えっ」

そんなことできるのだろうか。

「乳首だけで射精できる人もいるんだよ。ちよつと頑張りが必要だけど」

「んっ……イきたい……」

乳首でイけるようになるなんてすごい。そんなことができるようになったら、どこでもイかせてもらう

ことができる。

「じゃあ、それも退院してから練習しような」

「うんっ」

また退院後の楽しみが一つ増えた。嬉しい。

「ああ、どこに痕をつけようかな」

ボタンが外され胸が露わになる。薄い胸板。同じ食生活のはずなのに、どうしてか宮下のように筋肉が

つかない。

「ここもいいな……」

「あつ!!」

乳首を強く吸われる。けれどそこに痕はつかない。

「んっ……乳首取れちゃうっ」

かなり強く吸われる。気持ちいい。痛いけれど、それがいい。

「うーん、つかないな」

「もう……」

乳首にキスマークを付ける——それはだいぶ前から冗談で行われていた行為だ。無知だった空が宮下にねだり、宮下はつかないと知っていたのにつけようとした。何度も何度も強く吸われて、快感で頭がおかしくなりそうになりながらその刺激に耐えていると、宮下が我慢の限界を迎えて盛大に笑ったのだ。

「吸ってもダメなら噛んでみようか。噛み痕ならつくかもしれない」

「あっ！」

ガリッと音がするのではと思うほど強く噛まれた。激痛。

「……つかないな」

「やあ……」

強く吸われた後、そして噛まれた後に、痕を確認するために指で撫でられる。硬くなってしまった乳頭を角度を変えて観察され、その度に転がされてしまう。

「ああっ、あっ」

「やっぱ乳首はダメか……」

もっとしてほしいのに、呆気ないほどすぐに乳首から離されてしまった。寂しい。

「空？」

「乳首寂しい……もっど」

「もっど？ でも乳首には痕がつかなかったよ」

~~~~~

「じゃあ始めます」

モニターには薄黄色のものが写っていた。しかしそれはすぐに動く。画面の中に一瞬椅子の脚が写り、そして足を大きく広げた空の下半身が写った。

「やっ！」

まさか、そんなところから写されるなんて。せめて体内に入ってからなら耐えられるのに。

「空くん、危ないから動かないでね。ちゃんと見てもらおうね」

「やあ……」

「空。頑張ったところをちゃんと見せてくれ」

「空くんも、宮下さんに変えてもらった身体だよ。ちゃんと見ようね」

「うう……はい……」

「空くん、手術のところなんてなかなか見られませんかよ。体感で実感できても、観ることは難しいですから今のうちにしっかりと目に焼き付けておきましょうね」

狭山にまで言われてしまうともう腹を括るしかなかった。手すりを握る手に力を入れ、頑張つてモニターを見上げる。

「可愛いアナルだ」

「や……」

すぐ近くで囁かれた言葉。でもきつと、医師にも狭山にも聞こえてしまっているだろう。反応はされな  
いけれど。

「じゃあアナルを開くよ。痛くないから力を抜いていてね」

冷たいものがアナルに差し込まれた。いや、観ているので分かる。皆に見られてはしたなくヒクヒクしているアナルに嘴型の器具が挿入されている。

「あ……っ」

つい声が漏れてしまった。だつてすごくいやらしい画なのだ。自分のアナルが他人によって開かれると  
ころを宮下と一緒に観ている。

「声我慢しなくていいからね。前立腺チップは感度の検査も必要になるので、気持ちいいときはちゃんと  
声を出して。あと、痛いときや違和感を覚えたときもちゃんと言葉で教えてね」

そうだ、これは検査なのだ。確認。だからちゃんと、言葉で状態を伝えないといけない。

「はい……」

でもやはり宮下以外の人がいるところで感じてしまうのは恥ずかしい。他の人の手、というか、器具な  
のに。

「空。頑張れ」

「はい……」

他の人に感じさせられてしまうというのに、どうして宮下は平気でいられるのだろう。嫌じゃないのだろうか。

（仕事だから……？）

医師や看護師は当然仕事だ。だから気にならないのかもしれない。

（気にするのは僕だけ……）

それがまた恥ずかしい。皆、ここにいる空以外の全員が仕事と理解して淡々としているのに空だけが意識してしまっている。

（……勃起しないおちんちんで良かった……）

もしペニス機能が覚えていたらきつと勃起してしまっていただろう。そんなことにならなくて良かった。

「大丈夫かな？」

「はい、お願いします」

ふう、と深く息を吐いたのを見届けてから医師が言った。やっぱり優しい。仕事だからと強引に進めるのではなく、こちらの状態をきちんと確認しながら無理せず進めてくれる。

「じゃあ、お尻を開くからね」

モニターを見上げる。器具の挿入を喜んでいたアナルがゆっくりと開かれていく。そしてそれに合わせ、画像がアップになっていく。

「っあ……ん……」

「空。気持ちいいのか」

「はい……お尻開くの気持ちいい……」

恥ずかしさを堪えて言うと、宮下は頭を撫でてくれた。そして医師も「上手に言えたね」と褒め、狭山も「その調子です」と応援の言葉をくれる。

「じゃあカメラを中に入れていきます」

画面がぶれた。きつとカメラが狭山から医師の手に渡ったのだろう。ゆっくりと、全てを収めるかのように進むカメラ。アナルに近付いていく。画質のいいカメラは皺の一本一本まで綺麗に写す。

「あ……」

「ん？」

医師が手を止めた。

「すみません……恥ずかしくて……」

「空は見られるだけで声が出るほど感じてしまうんです」

「そうですね。敏感ですね」

医師が小さく笑う。恥ずかしい。顔を覆ってしまいたい。けれど、宮下が変えてくれた身体をちゃんと見たい。

「はい、カメラが入りますよ」

中は赤く濡れていた。うねうねと、異物を奥へ誘い込むかのように襞が動いている。

「もう少し奥、精囊から先に確認しますからね」

カメラはやはりゆっくりと中に進んだ。

「いやらしいな……」

「や……」

「成さん……」

思っても言葉にしないでほしい。すごく恥ずかしい。

「あ、ここです。ちよつと膨らんでいるのが分かりますか」

「はい」

画面にアップになった膨らみ。そこだけが、ぼこりと膨らんでいる。

「……傷の様子もかなりいいですね。回復が早いです。ちよつとカメラで突いてみるから、痛かったら言

つてね」

「はい」

「あ……」

角度が変わったせいで、画面いっぱい膨らみが写された。そして近付く。

トン。

「あっ！」

「痛いかな」

「いえ……気持ちいい……」  
ちよつと突かれただけ。恐らく便が通る方が刺激が強いだろう。なのに簡単に感じてしまう。

「じゃあ次はもう少し突きますよ」

「はい……」

またカメラが動く。こうして内部を弄られる状態を見ながら、というのは精神的にも興奮を煽られているような気になってしまう。

トントン。

「あつ……」

「痛みはないね？」

「大丈夫です」

「じゃあ、今からスイッチを入れます。ゆっくり様子を見ながらするので、途中痛みがあったらすぐに言

つてね」

「はい」

ドキドキする。一体どうなってしまうのだろう。

「狭山くん、君はペニスを見ていて。漏れて来たらすぐに教えてください」

「はい」

(恥ずかしつ……)

足を大きく開いた体勢では当然ペニスも無防備な状態だ。皆の意識がアナルに向いていたから忘れてしまっていたけれど。

「……空くん、大丈夫ですよ。元々自動ミルクキングのための手術ですからね。精液をちゃんとお漏らしできるとも確認しないといけません」

「はい……」

一度目を閉じ、ふーと再び息を吐いてから画面を見る。すると画面に写されていた膨らみが大きくなっ

た。

「あつ！」

「痛い？」

「いえつ、あつ、あつ」  
痛みは全く感じなかった。でも、押されている感覚はしつかりとあつた。精囊の横に入れられたバルーンが膨らみ、精囊を押しているのだ。

「……一度萎ませます」

画面では小さな膨張だった。そして元に戻るのもすぐに戻る。でも圧迫感は大きかった。  
「うん、腸壁の伸縮も問題ありません。次はもう少し大きく膨らませるからね」

~~~~~

「空。先生のミルクキングは気持ちいいか」

「っ……！」

先生のミルクキングなんて。これはただの確認なのに——確認なのに、感じてしまっていた。

「……はい……ミルクキング気持ちいいです……お漏らし嬉しい……」

「そうか。良かったな」

「……はい……」

萎んだ心。そのはずなのに、どこか喜んでいる。宮下に見守られながらのミルクキングに。
「もう全部出たかな」

「……はい」

だからだと漏らした液体を狭山に拭いてもらい、バルーンの確認は終わった。

「じゃあ次は前立腺チップの確認に入ります。今度はちよつと激しいけれど、頑張ろうね」

「はい……」

今度は何がどうなるのだろう。よく分からないままモニターを覗いていると、カメラが動き、少しずつ抜けていく。

「んっ」

「ああ、アナル気持ちいいね。でも退院してからもっと気持ち良くしてもらってね」

「っ……」

(もうやだ……)

恥ずかしいばかりだ。いやらしいところが一つ一つばれていく。

「こっちは膨らまないから。少しずつ強くしていくからね」

はい、と小さく返事をした途端、下腹部を貫くような刺激が襲った。

「あああああああ！」

「痛い?!」

医師が慌ててスイッチを切った。そして立ち上がり、顔を覗き込まれる。

「いえ……痛くは……」

「え、そんなに気持ち良かった？」

「う……」

「空」

「……気持ち良かったです……」

今の急激な刺激への驚きと激しい羞恥。涙が勝手に落ちていく。耳が濡れ、髪を濡らす。

「空……」

「やだあ……恥ずかしい……」

「恥ずかしくないよ。気持ち良くなるための機械を入れてもらったんだから。空が気持ちいいってことは、手術が成功したってことだよ」

「う……」

言いたいことは分かる。頭では理解できる。けれど今はまだ楽しむ時間じゃなくて、機械の動作チェックの時間なのだ。それから傷の確認。なに感じてしまった。たくさん感じてしまった。

「……空くん、大丈夫ですよ。一度ゆっくり深呼吸してみましようか。つらいとき、空くんは自分で深呼吸できるようになりましたね」

「狭山さん……」

知っていてくれたのか。そんな些細な成長も見ていてくれたのか。

泣きながら頷き、嗚咽が漏れるのを堪えながら深く息をする。狭山を見ると優しく頷いてくれていた。

「先生……ごめんなさい。大丈夫です。お願いします……」

「いいこだね。ちょっとだけ頑張ろうね」

「はい……」

頷くと、今度は頭に手の感触。見上げると宮下が励ますように頭を撫でてくれていた。

(大丈夫……皆優しい。皆見守ってくれている……)

涙を拭い、モニターを覗る。そこは特に何も変わらないように見えたけれど、スイッチが押された瞬間

震えだした。

「あああああああ！」

「……まずいかな……」

医師の声が聞こえる。けれど言葉が出せない。何がまずいのだろう。

「先生……」

狭山も心配そうだ。どうしたのと聞きたいけれど、口が動かない。

「あああああああ!!!!!!」

もう止めてほしい。頭がおかしくなりそう。なのにスイッチを切ってくれない。

「やあああああ！」

前立腺が内部から震えている。指で擦られるだけで泣きたくなるほど気持ちいいそこを、人間には決してできない動きで揺さぶられている。

「先生？」

「宮下さん、これ、一番弱いんです。こちらはつまみで強さの強弱を弄れるんですが、これはスイッチを入れてすぐのところ……つまみに触れた衝撃だけでオフになってしまうような弱さなんです」

「……それで、この感度ですか」

「よほど前立腺が敏感なんでしょう」

「やあああああ!! やめでえええええ!!」

イきたい。なににイけない。強すぎて怖い。それにペニスだって勃起していないし、しっかりとミルク

ングされた直後の身体では上手に快感だけを拾って絶頂に上ることができない。

「やああああ!! ……あ……」

止められた振動。気付けば視界がぐちゃぐちゃだった。手で強引に目を擦るけれど、身体が壊れたのか

涙は一向に止まらない。

「う……」

「う……」

「空……」

「空くん、あのね、今すごく弱かったんだ。弱いところだった。でも、確認があるから強い状態の動きと、そのときの前立腺の傷も確認しないといけないんだ」

「え……や、やだっ、やだっ！」

いやいや、と逃げようとするのに身体は動かない。首を振っても、嫌と何度言っても誰も「じゃあやめようか」とは言ってくれない。

助けて、と宮下を見上げる。けれど目を逸らされてしまう。狭山を見る。狭山も目を逸らした。嘘——信じられない気持ちで医師を見る。医師だけは、真っ直ぐ空の目を見てくれた。けれど、優しい言葉はもらえなかった。

「ごめんね……苦しいけど、なるべく急いで確認するからね」

「やっ、やだっ！　ねえっ、やだよっ！　壊れちゃう、無理だよっ、壊れちゃうよお！」

助けて、とすぐ隣の宮下の腕に縋る。けれど慰めるように手の甲を撫でるだけで何も言ってくれない。

「やだっ、狭山さんっ！　助けてっ！」

約5万1千文字です。

宜しくお願ひ致します！